

ギリシャ・サントリーニ島における 伝統的集落の再生と観光振興

所員 石 本 東 生
(地域創造学部准教授)

1. 世界的な人気を博すサントリーニ島とその地理的概要

ギリシャのエーゲ海南部に位置するサントリーニ島は、アイランドリゾート地として過去に数々の世界的な賞を受賞している。今から5～6年前のことではあるが、2012年の年末、英国BBCの公式ウェブサイトにおいて「世界の最も魅力的な島 ベスト5」の筆頭選ばれ、翌2013年3月には、トリップアドバイザーの“Travelers' Choice 2013”において「世界の人気の島トップ10」で5位にランクインし、ヨーロッパ部門としては栄えある1位に輝いた。他にも、島内のアコモデーションが様々な形で旅行業界の最高評価を得ている。今や世界中から多くのリゾート客、クルーズ客が訪れるほどの憧れをもって訪れるエーゲ海、否、地中海きってのデスティネーションである。

サントリーニ島はエーゲ海のほぼ中央部に円周状に浮かぶキクラデス諸島の南端に位置する¹⁾。アテネの外港であるピレウス港より約210 km、クレタ島から120 kmの距離。紀元前2000年という石器時代からエーゲ海で最も古い文明がこの地に発生し、海上交通の要所として繁栄した。

紀元前1500年頃に島中央部の火山が大爆発を起こしたため中心部が海底へ陥没し、カルデラ状の地形に変形。今日では、サントリーニ本島の他にテラシア島とアスプロニシ島が内側に絶壁を連ねて環状に続き、その中に新旧2つのカメニ島が黒々とした溶岩をむき出しにして並んでいるが、このような島々の地形は長期にわたる火山活動によって生み出されたものであって、もともとは本島のプロフィティス・イリアス山を核とする円形の一つの島であったと考えられている²⁾。

サントリーニ島の面積は76 km²。島内に13の集落が存在し、人口は約7千人。ピレウスやクレタと船の便で、またアテネとの間に空の便で結ばれている。また、夏期の観光シーズンには、主にヨーロッパ各地から多数のチャーター便がダイレクトに入ってくる。東地中海およびエーゲ海のクルーズでは決して外せない、最も魅力あるスポットとして高い人気を誇っている。



写真1 サントリーニ島フィラの街。眼下にエーゲ海を望む



図1 サントリーニ島の地図

2. サントリーニ島の歴史上特筆すべき時代

(1) 石器時代の繁栄 エーゲ海文明の発祥地ーアクロティリ遺跡ー



写真2 アクロティリ遺跡（博物館）内の様子

そのサントリーニ本島南端の海際には「アクロティリ」という名のエーゲ海最古の遺跡が発掘されており、7年の歳月をかけて建設が進められていた博物館が2012年4月に竣工した。同博物館は遺跡全体を覆い尽くす設計の壮大な施設となっており、アクロティリ自体は世界文化遺産に登録さえされていないものの、先史考古学上非常に重要な遺跡である。遥か4千年前のものとはいえ、切石が緻密に美しく積み上げられた2階建、3階建に及ぶ建造物群が存在する。さらに住居地区と公共建造物地区とに区分けされた都市機能まで持ち合わせていた。

日本における地中海先史考古学の第一人者である周藤（1997）は次のように述べる。「これらの建築は

後期青銅器時代の爆発に先立って住民が退去した直後に火山の噴火物によって埋没したため、そこで営まれていた当時の生活の様子はあたかもその時点で封印されたように克明に保存されており、遺跡から得られる考古学的な情報の量は、同時代の他の遺跡の比ではない。アクロティリが『先史エーゲ海のポンペイ』と呼ばれる所以である。そして、この情報量のおかげで、アクロティリが少なくとも内的な構造という面では、極めて都市的な集落であったことが分かるのである」と³⁾。

周知のとおり、紀元79年、イタリア南部ヴェスヴィオ火山の噴火時に、火山灰が降り積もり火砕流に飲み込まれてその歴史を閉じたかに見えた古代ローマ都市ポンペイ。しかし幸いにも地中に埋もれたがゆえにその全貌を保たれ、18世紀半ばの発掘により約千七百年ぶりに再びその姿を現わし、歴史考古学研究上、世界的にも非常に貴重な発見となったのがポンペイ遺跡であった⁴⁾。

そのポンペイよりもさらに千五百年以上も遡る古代エーゲ海文明、その様子を豊かに伝えるアクロティリ遺跡（博物館）が2012年春オープンしたことは、今後のサントリーニ島の観光力をより高める重要な観光資源の誕生であった。

(2) その後、現代までのサントリーニ島

その後の歴史上、サントリーニ島は度重なる地震で集落は被害を受けたものの、紀元後16世紀後半から18世紀初頭には、ギリシャ正教のキリスト教文化がこの地に根付き興隆した。しかしながら、先のアクロティリが「先史エーゲ海のポンペイ」と呼ばれるほど煌めきを放っているのに比べると、その後のサントリーニの歴史において、同様に特筆すべき時代をあげることは少々困難である。むしろサントリーニは次に来るべき未来の繁栄を信じて、悠久の時をひっそりと待ち続けた、と言うべきだろう。本稿においては、しいて中間の歴史は割愛し、19世紀末期以降の近現代のサントリーニへと飛ぶことをご了承いただきたい。



写真3 アクロティリ（博物館）内、2階建ての民家跡

3. 島内第2の街イア（Oia）とその歴史

(1) 魅惑の観光スポットが秘める「過疎化」という過去

現在のサントリーニ島において中心の街となるのはティラ島中部のフィラ（Fira）。そしてそれに続く第2の街が同島北部に位置するイア（Oia）である。イアの街は中世よりサントリーニにおける5つの Castle Towns の一つで、Castellia（カステリア）と呼ばれていた。現在はフィラと並び、サントリーニ観光においても最も魅力的なスポットの一つで、カルデラの絶壁にへばり付くような「洞窟ホテル」から眼下に望む紺碧のエーゲ海と、その西の水平線に沈む夕陽の美しさは、世界中から訪れる旅行客を魅了してやまない。

ところが、このイア地区にはつい40年ほど前まで「過疎化」で苦しみ、荒廃しきっていたという歴史がある。その状況から、どのようにして世界中の人々を魅了する街と生まれ変わったのか。そこには、おそらく「経済危機の最中にも揺るがない観光力」そして「持続可能な観光発展」のカギが隠されているのではないだろうか。筆者はそう思いつこの地での調査を行った。

(2) 海運業の拠点として繁栄を迎えたイア

イアの興隆期は19世紀終期から20世紀初めにかけての時期。当時イアには商船団が数多く寄港し、東地中海においてロシアとエジプトのアレクサンドリアを結ぶ航路の格好の中継地点として繁栄していた。つまり、前述のアクロティリの時代から3500年もの年月を経て、サントリーニは再び日の目を見ることとなったのである。

イアは歴史的にも船舶所有者の街であったと見られている。例えば、1890年にはイアの人口は2500人に満たなかったが、130もの船舶がイアの居住者所有であり、カルデラ下のアルメニ港には小さくとも商船用のドックが造られていた。その時代、イアには13の行政教区が設けられ、銀行1件、税関、様々な伝統工芸の工房、後背地からの重要な農作物を販売する店舗も存在した。

では、以下に当時のイアの市街地について詳しく述べることにする。

4. イア地区内各集落の特徴と建築様式&景観

イアの市街地は、ある軸線に沿った線状構造の集落であり、その軸線は現在大理石が敷き詰められた街のメインストリートとなっている。集落はそれを中心にカルデラの絶壁側と尾根側に広がっている。その集落は以下のような4つの居住区に分けられ、全体で約960個の建物が存在していた⁵⁾。

(1) 船舶所有者の居住区

カルデラの断崖の最上部にあたる平坦な区域。イアにおいて海運業で成功した船舶所有者等が建てた邸宅群が



写真4 サントリーニ島北部イア地区の街並



写真5 イア地区のグーラス集落

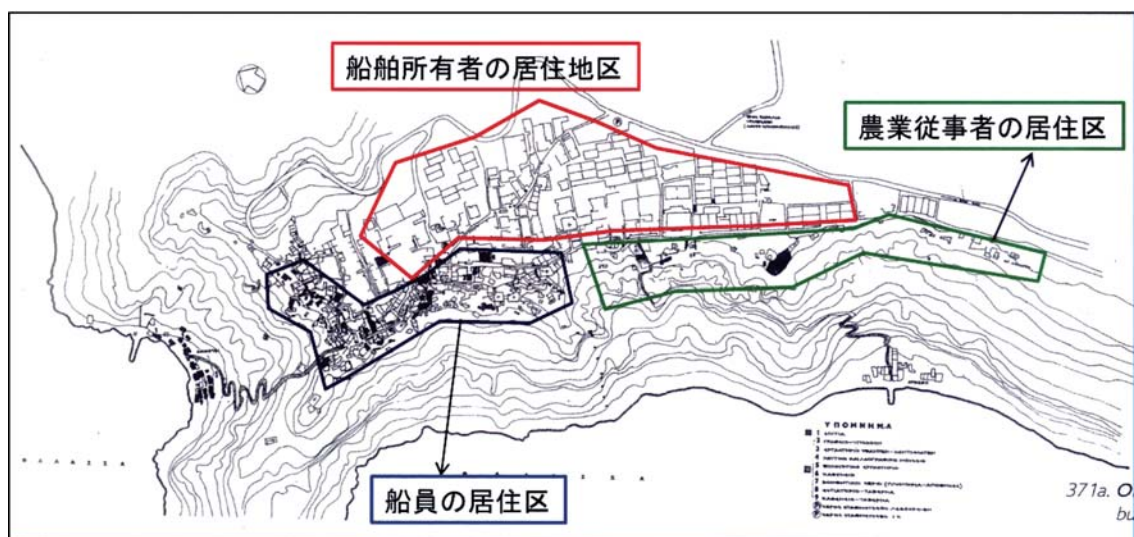


図2 イア地区における居住地域区分図

この居住区に集中している。特に広い中庭を持ち、新古典的、またヴェネツィア的な建築要素を取り入れている。エントランスの前面も柱形以外の部分に赤色火山岩を貼り込むなど、とても豪華な造りとなっている。これらの家屋で特徴的なのは、雨水を集めて取り込む機能的な集水・貯水システムが取り入れられていることである。

(2) 船員の居住区

先の「船舶所有者の居住区」に接する下方となり、カルデラの急峻な断崖面にあたる。密集して複雑に入り組んだ居住区となっている。船員の居住区は殆どがサントリーニに典型的な「洞窟住居」によって構成されており、住居内部は応接間と居間、寝室が仕切り壁を隔てて繋がっている。同時に独特の彫細工を残している。



図3 修復・復元当時のイア地区の様子
左の列3枚の写真は船舶所有者の邸宅

(3) 農業従事者の居住区（ペリボラス）

上記二つの居住区と比べると新しく市の南部に拡大した区域で農業従事者等が居住した。「船員の居住区」よりは比較的傾斜がゆるやかで、土地を確保しやすく、農作業用の用具や家畜も飼育しやすかったという理由がある。しかし今日は殆ど他の集落と一体化し、境界線も区別できない。ワイン工房とその他農作業場も存在した。

(4) アムディ港、アルメニ港

そこから下方、海までは断崖絶壁が続き、海岸部にはアムディ（Ammoudi）そしてアルメニ（Armeni）と呼ばれる二つの港がある。港まではとても険しい断崖をジグザクに辿っていく長い階段の小路が造られている。

5. 伝統的家屋「洞窟住居」が造られた理由

ところで、19世紀終期から20世紀初頭にかけて、イアをはじめサントリーニの各地区・集落で「洞窟住居」が造られるようになった理由は何だろうか？ それには、先のアクロティリにまで遡るようなサントリーニの地理的特異性が大きく影響している。

というのも、歴史上度重なる火山噴火を起こしたこの島の土地は比較的軟らかな火山灰層で厚く覆われており、且つカルデラの断崖の急斜面では、宅地を求めること自体も困難であった。そのため、海運業が盛んだった当時、富裕な船主等を除く一般の船員たちは、断崖面に横穴洞窟を掘って住居とした方が、より安価に広い住まい空間を比較的容易に造ることができたのである。そして彼らは岩盤に洞窟を掘りぬいただけではなく、エントランスレベルには、屋根が主にドーム型をした石造りの拡張（継ぎ足し）部分を設け、立派な玄関ホールに仕上げていた。建築形式としてはドーム型屋根の他に、十字ドーム型のものも多く見られる。これにはやはりサントリーニが中世にはキリスト教の拠点であったことが影響しているとみられる。それらがイアをはじめとした島内の各集落において独特の景観を形成することとなった。



図4 カルデラの断崖面に建つ船員の居住区 伝統的洞窟住居群

6. 繁栄した海運業の終焉とイア、サントリーニの過疎化

ところが、このように美しいイアの繁栄もつかの間、海運業の世界でより安全に長距離を航行する「蒸気船」が「帆船」よりも優勢になるにつれ、ギリシャ&エーゲ海における海運業の中心はアテネの外港であるピレウス港に移っていき、イアは衰退の一途を辿ることになる。1940年には1348人であったイアの人口が、1977年になるとたったの306人まで減少していたのである。また、1928年と1956年には地震による被害もあり、さらには1942年冬の過酷な天候時には作物が育たず、食料が途切れ、餓死者も少なからず出た。そういった天災の影響もあり、その後次第にサントリーニを離れる人々が増加した。つまり、イアのみならずサントリーニ島全体の集落が典型的な過疎地となり、寒々と荒れた果てた孤島へと様変わりしていった。

7. トラディショナル・セトルメントとしてのイア

しかしその後、イアの繁栄を復活させるきっかけとなる出来事があった。ギリシャ観光省とギリシャ政府観光局（Greek National Tourism Organisation）がイア地区の各集落に目を留め、1976年より荒れ果てた集落の大規模な修復・復元プロジェクト（第1期工事）に着手したのであった⁶⁾。1992年によりやく第4期工事を終了したが、計16年の歳月をかけて、イアはいわゆる「トラディショナル・セトルメント」へと変貌したのである。以下にその具体的なプロジェクト例を挙げる。

- ① 約60件の伝統的家屋が修復・復元されており、総計200におよぶベッド数が確保されるほどのゲストハウス群に転用されている。それらはイア、ペリボラス、アムディの各集落に分散しているが、且つそのすべてがカルデラの断崖側で「オーシャンビュー」の家屋が修復・復元工事の対象として選ばれた。また、このプロジェクトには「船舶所有者の邸宅群」は含まれていない。その対象家屋選定の条件は以下の通りである。

- i) 「空き家」あるいは放棄された家屋であること。

ii) 個々の建造物が持つ建築様式が重要視された。

iii) 原型は留めていなくとも、周囲の建造物との比較からほぼ原形に近い姿が想定可能な家屋。あるいは、所有者の記憶や資料から復元可能と判断された建造物。

② 1 件の古い喫茶店はゲストハウスの「レセプション兼オペレーションオフィス」として改修された。

③ ギリシャ政府観光局とギリシャ中小企業局の監督下で、レセプションオフィス隣の古商店が「伝統織物」の工房に改修された。ここでイア在住の、あるいは他の町々からの婦人たちが、伝統織物の技術を訓練且つ習得することで、その技術の継承保存にも一役買うこととなった。ここで作られたカーペット、ブランケットなどは、政府観光局運営のゲストハウスで使用され、またその宿泊者に限って販売された。

④ 「海洋博物館」がイアのメインストリートに面するある船舶所有者の邸宅を改装して作られた。先述の通り 19 世紀から 20 世紀初頭、東地中海における商船団の基地ともなったイアらしく、当時の帆船の舳先となった女神像など、数々の個人コレクションの寄贈によって得た船舶関連の珍しい品々を展示した。

⑤ イアの古いワイン工房跡“Cannava”は、レストランに改装された。現在は文化イベントも催されるホールとしても使用されている。

⑥ グーラス集落はイア地区内でも最も古くまた美しいところで、イアの中核とも言える。ヴェネツィア統治時代のサントリーニには 5 つのキャッスルタウンがあったが、そのうち一つのキャッスルがここに存在した。1920 年当時の写真素材からは、グーラス地区がとてもよく景観保存されていたことが確認できるが（図 12 参照）、先述のとおり、その後商船団の基地としての役割低下 ⇒ 島内人口の本土への流出、そして 1928 年と 56 年の大地震などで、その後はほぼ廃墟となっていた。



写真 6 未修復の古い教会跡。屋根が典型的な十字ドーム型をしている

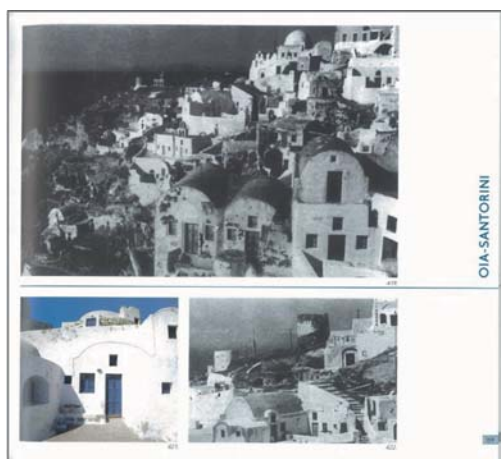


図 5・写真 7 左は再生プロジェクト開始直後 右は現在のグーラス集落 どちらもほぼ同じ場所

⑦ ギリシャ政府観光局がグーラス集落の修復工事に着手した 1976 年時点では、地震の被害によるものか、この地区の中心的教会であったパナギア・プラツァニ教会はその基礎部分を残すのみで殆ど全壊状況であった。小さなゾードホス・ピギ教会も被害が大きかった。しかし、グーラス集落は当時からギリシャ文化省の国の重要景観保存地区に指定されていたので、古城の城壁部分とゾードホス・ピギ教会は完全に修復された。

⑧ また、公共インフラとしての汚水・上水、貯水池がイア地区内に完備された。

- ⑨ その他、メインストリートを大理石の舗道に造り替え、さらにアムディ港に栈橋を建設した。



図6・写真8 地震被害の大きかったゾードホス・ピギ教会と、現在の同教会 完全に元通りに復元された

8. プロジェクト終了後のイアの街

初期の第1&2期プロジェクト（1976～1980年）においては、ギリシャ政府観光局の指揮の基、以上の工事が完了した。この期間に同工事に関わった現地の職人たちが、貴重な修復・復元の技術を得たことは、同時にサントリーニの伝統的の家屋の建築技術を後代に継承するためにも、この上ない賜物であったと言えるだろう。

後期の第3&4期プロジェクトは、2つの民間建設会社に委託され、引き続き修復・復元工事が継続された。その代表的な工事の1つが「耐震用擁壁補強工事」である。修復・復元された「トラディショナル・セトゥルメンツ」全体の7割に当たる建造物において施工された。

同プロジェクト終了当初は、復元された伝統的家屋は政府観光局直営のゲストハウスとして宿泊客を受け入れるようになったが、それ以降順次民間に払い下げられ、ホテル、レストラン、カフェ、商店などの経営がより活発に進められるようになった。さらに、他の未修復の古民家に対しても民間によるリノベーションの動きが一段と加速し、街全体が年々活気を取り戻していった。

ただ近年は、イアの街並みは「トラディショナル・セトゥルメンツ」として、その景観保存および建築、改修が国の特別法により厳しく保護・制限されており、いずれの建築・建設計画も国の審議委員会により承認されない限りは、施工は出来ないことになっている。

9. 現在のイア地区グーラス集落のホテル例

筆者は昨年5～6月の現地調査の際、イア地区の中核となるグーラス集落にあるホテル「エスペラス・トラディショナル・ハウシズ」(Esperas Traditional Houses)を視察した。以下の写真は同ホテルを撮影したものである。

このホテルも当時の洞窟住居をほぼ忠実に再現しながら、ホテルの客室として整備していった。当時の家屋の建築素材としては、赤あるいは黒の石材と石灰を混ぜた火山灰が特に強度の高いモルタルとして使用されていた。典型的な洞窟住居の玄関は狭いものの、奥深く掘られている。住居の手前部分は必



写真9 ホテル「エスペラス・トラディショナル・ハウシズ」の客室例



写真10 ホテル「エスベラス・トラディショナル・ハウシズ」一部外観

ず「居間」となっており、また「寝室」は必ず奥の部屋になっている。居間と寝室の間には、ちょうど玄関部分と同じタイプの壁が設けられ、その壁の中央にはドアが、そして両脇に左右対象となる窓が一つずつ作られている。

通常、台所はとても小さく、低い丸屋根の下にある。居間と繋がっており、居間にいる家族と直接会話ができるようになっている。トイレは中庭の方で、本住居とは別棟になっていた⁷⁾。これらの洞窟住居や煙突、各住居を結ぶ外階段などの凹凸が複雑で、遠景がとりわけ美しい。

10. まとめ

ーサントリーニ島の「持続的な観光・発展」に関してー



写真12 イア地区の中心部を縦断するメインストリート。大理石の石畳



写真11 カルデラの断崖面に建つホテル「エスベラス・トラディショナル・ハウシズ」

以上、エーゲ海サントリーニ島における、主にその過去の過疎化問題から脱却した「観光まちづくりの特徴」という観点から、事例報告を行った。そして、最後にこう付言したい。同島内のイア地区およびフィラ地区、ひいてはクレタ島、ロードス島、ミコノス島などエーゲ海における屈指の観光デスティネーションにおける観光発展の最大要因は、地域の古い街並みを修復・復元し、そこに新たな息を吹き込み、さらにハイセンスでモダンな利用法を取り入れている点である。つまり、一方で「伝統を大切に重んじ」ながらも、他方で「旧態を排除」して「現代感覚」を常に忘れずに前面に出しているところである。加えて、毎年冬の

オフシーズンには、ホテル施設内外の再塗装をはじめ徹底したメンテナンスを行い、翌シーズンの集客に備えていることは、「シーズン」と「オフシーズン」が明確に分かれていない日本人々にはあまり知られていない点であろう。

また、ヨーロッパの有名な歴史観光都市には共通するように、街全体が復元された伝統的集落であり、ありふれた街並みに伝統的建築物が「混在・点在」するような類のものでは、魅力に欠ける。すなわち、伝統的集落あるいは歴史地区としての「統一性」の問題である。ギリシャにおいても、それぞれの地域の個性ある街並みを統一的に生かし、まちづくりに励んでいる観光地ほど根強い人気を誇っているのである。そのようなヘリテージ・ツーリズムへの明確なコンセプトをもった街が、島が、南エーゲ海とクレタ島には格段に多くみられる。このような長年の「まちづくり」の努力が要因となり、観光発展に繋がっているのである。そして同時に地域と街を再生し、一定の規制の基に発展させているという意味では、「都市における持続可能な観光と発展」の一つのモデルとなるのではないかと筆者は考える。

事実、サントリーニやクレタに見られる地域開発のフィロソフィーが、他の島々やギリシャ本土のペロポネソス半島南部のラコニア、マニ地方、中部のピリオン地方などへ拡大し、観光集客力をアップさせている事例も出てきている⁸⁾。ゆえに、今後も同様な観点から注目すべき事例への調査研究を継続していきたいと思う。

*本報告は、拙論「ギリシャ・エーゲ海地域におけるトラディショナル・セトルメントの復元と持続可能な観光・発展の事例考察－サントリーニ島の現地調査を基に－」、『地域創造学研究 XIX（奈良県立大学研究季報第24巻第1号）』、2013年、pp.25～57を基に、加筆修正して掲載したものである。

注・引用文献

- 1) 図1「ギリシャ地図（地域区分図）」において四角の印で囲んだ2地点を参照。地図中央部の印が首都アテネ、そしてその南東部に印した島がサントリーニ島。
- 2) 周藤芳幸、『ギリシャの考古学』、同成社、東京 1997年、p.100./周藤芳幸・村田奈々子、『ギリシャを知る事典』、東京堂出版、2000年、p.64。
- 3) (上掲書) 周藤芳幸、1997年、p.104。
- 4) マリア＝ロザリア・ポリエッロ、「ポンペイに生きる」序文、『ポンペイ展－世界遺産古代ローマ文明の奇跡－Vivere a Pompei 図録』、2010年、19-24。
- 5) 図2～6の出所は、上記参考文献の Preservation & Development of Traditional Settlements (1975-1992) Cultural Heritage Showcase。
- 6) 当時、ギリシャ観光省 ギリシャ政府観光局は、イアの集落以外にも、ギリシャ全土で16箇所に及ぶ「伝統的集落」を再生するプロジェクトを実施した。その事業報告書が上記参考文献の Preservation & Development of Traditional Settlements (1975-1992) Cultural Heritage Showcase である。
- 7) 現在のトイレは、ホテル宿泊客の利便性のため、洞窟の客室内に設けてある。
- 8) Alice Hatzopoulou, Stefanos Gerasimou, Sustainable Development of Greek Mountainous Traditional Settlements, WSEAS Transaction on Environment and Development, Issue 9, volume 2, 2006, pp.1226-1229。

参考文献

- － Didoni-Bozineki, P., et al., Preservation & Development of Traditional Settlements (1975-1992) Cultural Heritage Showcase, The G. N. T. O Programme, Hellenic Ministry of Tourism and Greek National Tourism Organisation, Athens, Greece, 2009, pp. passim.
- － Haitalis D, Getting to Know Santorini: Complete Tourist Guide, Ekdosis Haitalis, Athens 1997.
- － Walter L. Friedrich, Fire in the Sea: The Santorini Volcano, Natural History and the Legend of Atlantis, Cambridge University Press, Cambridge 2000.